慶應義塾大学図書館蔵『十和田山本地』翻刻・解題（三）

須田　学

七段目

されハ事態にもかくれたる、しん有ハあらわれてかく有りと、智徳ハともに一如にして、皆是しん如の玉の光り、古老の言し文詞、扨も南蔵ハ四国の内を立出て、夫ゟ九州に入玉ひ、ちくぜん十九社、ちく後四社、ぶぜんぶんこ日向大隅見めくりて、さつまの国かた村に着玉ひ（°）とある所に宿をもとめ、しばしつかれを晴さるゝ、あるじの女房申けるハ、御僧殿ハ行脚修行に出玉ふ、此村ニ一ッのなんき御座候、此所に首ゟ荒神ぢん社ましますか、毎年人ミこく一人つゝさし上候に、当年ハ此村の長者の番にあたりしか、親かう〳〵に慈悲深き人なれ共、前世のいんくわむくひけるか、一人りのあい子明神へ備るなけきの程ハいか斗、御僧殿の法しゆにてせめてハくけんすくわせ玉ひと申ける、南蔵聞召夫ハふひんの者ども哉、我行てすくふへし、案内頼との玉ひハ、亭主喜ひ御供して、長者の家に参りつゝ、ケ様〳〵の次第也、彼御僧の御法力にてすくわせ玉ふ事もやと語りけれハ、長者喜び先此方へとしやうし入、長者夫婦ハ立出て、右のあらまし語らるゝ、南蔵申されけるハ、其明神にゆひしよは候か、されハ首ハ廣野一夜の内に潟となり、人のうせる事数しれす、是に恐て村の者、明神といわひ三年ニ一度つゝ、人みこく備候、当年ハ我等か忰、身こくの文字みけんにすわり候、月とも星とも一人リの子、ふびんと思召玉われと、たゝさま〴〵と泣居たる、南蔵聞召いたわしき次第やな、さあらハ加持し参らせん、夫此方へ〳〵と仰ける、女房喜び子共を御前に呼出す、ヲゝ道りなることわり也、出きどくを見すべしと、そばに立寄、しはらくくわんねんし、ごしん神法三元加持無常霊宝神道加持はらひ給ひきよめ給ひと、宝じゆを以撫玉ひハ、身こくの文字たちまちうせて南蔵のみけんにあり〳〵とすわりしハ、りやつかう不思義そ有かたき、夫婦ははつと肴難（かんじ）むねにあまり

て、御衣にすかり付、さめ〳〵と泣居たる、家内の者ともどうてんし、かんたん肝にめひじつゝ、悦ひこそはどうりなる、扨明る日になりしかハ、ねき神主身こくの輿をよそおひて、刻けんおそしとよばわりける、其時南蔵出給ひハ、夫婦取付我子ハ助かり候え共、御僧殿に御難をゆつり申事のもつたひなやと、もたへこかれて泣かるゝ、神主是を見て人違ひにてハいか也、南蔵御覧じ尤也、某昨夜日暮て宿をかりしに不思義や身こくの文字すわり候、何さま明神の御取かへと見えたり、ぜひに及す愚僧身こくに参んと仰ける、其時神主其本人を見せ給ひと申ける時に、忰立出社人立寄改め、是ハ目出たしと南蔵を輿にのせ岩屋をさして急きける、かくて岩家にもなりけれハ、輿ゟおろし岩家の前にすへ置て、御神楽そうし奉り、夫ゟ船にのり、ろかひはやめてにけかへる、南蔵ハ只壹人法花経読誦ましますか、しばらく有て、にわかに山なりしんとうし、廿尋の大蛇角ハ深山の小木に事ならず、眼ハ日月の如く紅の舌を巻上ケ、身こくをのまんと来りしか、南蔵見てしばしためらひ扣たり、其時南蔵のたまひけるハ、我汝かゑじきにならんと来りけるハ、我もんと自他平等利益たり、諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為楽と一文字に飛込ミ給ひハ、ふしきや口は八ツにさけ八ようのれんけとなり、南蔵をすくひ上ケ、尊き御僧の法力にてぢやとうのくるしミまぬかれて、弁天とあらわれたりと光をはなつて見へにける、南蔵喜ひ、よひ哉〳〵と夫ゟも扇を上け招き玉ひハ、長者迎の輿を参らせて、我家へともなく奉る、此事四方に隠のあらされハ、遠近村里聞伝へ、おかまぬ者こそなかりける、扨又はやくも都に聞へ、多田ノ満仲公聞召、源氏のうち神にいわゑんと、天てうに達し、御堂新に建立し、今にれいけんいつしるし、それよりあるじに暇をこわれ、又もや廻国急かるゝ、扨夫ゟも、国〳〵山々嶽〳〵残りなく、奥羽に入せ玉ひ、出羽には羽黒の三ツの山、奥州百弐拾壱社見廻り玉ひと、わらんじの切るゝ処は何づくぞや、是より秋田に至らせ給ひ、岡の本山ふし拝ミ、夫より八森へさし至り、深径にまわり実ニや尊き霊現山、くわんぜおんふし拝ミ、しばしやすらひ給ひしか、四方にぐんするミのりの山松吹風の音までも、無常をさそふ菩提の岑、我か躰を難行苦行の却あれとも、わらんじ切る処なし、先しよしはこゝに身をとゞめ、苔の行を勤めんと、柴の庵を引結ぶ法花経どくじゆましますか、夜は御経昼大はんにや六百巻書おさめ、御報謝ニ奉、今に御堂ニ有とかや、きのふけふとハおもひとも、三年の春となりにけり、ある夜異形ぐんじて、山中かゝやき、くわんぜおんよふこふ有り、如何に南蔵よ、大願すでに成就せり、是より未申ニ向てけんなん谿谷わけ登らば、汝か住山定むべし、いそけ〳〵との玉ひて光をはなつ御寺の門に入玉ふ、南蔵ありかたしとおん跡らひ拝す、教ニ任せ出玉ふ、是は扨置、四の崎八郎は南蔵のおん跡したひ廻しか心細くも木曽路なるはんばさめかひすりわりとふけおのゝしの原打通り名ニのみ聞し是や此熊坂長はん、もの見の松、

弓手ニはるが打詠め、鳥居とふけを打こひて、ふもとの里に付にけり、日も夕陽がだむけば、宿かりはやとおもひつゝ、有家ニ立寄一夜の宿と乞けれは、主じ立出、御宿申度く侍共此頃はふつそうにて盗人おふく用心いたし折節、貴殿の様成長ケ高く骨たくましき人ニは油断成不かし、余所をもとめ玉ひと申ける、八力聞へて我等ニは子細有者ニ無之候、一夜明させたび玉ひとふたしらに乞ければ、女房立出見せもうせば、たゝ人ならす見え玉ふ、今宵も夜盗入ならば御加勢有て玉われかし、宿参らせんと申ける、八力聞で夫こそ安き御事なり、国人弐百人ハものゝ数とハぞんぜず、必す気遣ひし玉ふなと申けれハ、さらハ此方へ入らせ給ひやと、供なひ内へ入にける、亭主喜ひ種〳〵にもてなし給ひける、扨八力ハ旅のつかれの夢枕しばしまどろミ伏居たる、夜もはや夜半過行ハ、木曽の山家に隠なき盗ぞくの大将熊坂角判とて音に聞へし曲者有り、手下のがうどふ貳百余人、熊手さすまたつきはしご、得物〳〵をとり持せ、屏をのり越へ大庭に忍込ミ、時をどっとぞ上ニける、亭主初め家内の者、驚きあわて泣さわく時に、大将大音にて木曽かひどふに隠なき、熊坂の角判とハ我事也、金銀材宝を出せ〳〵とよばハったり、亭主ハ猶〳〵うろたへて何のしやべつもあらハこそ、十方ニ暮たる斗なり、家内のもの共一ッ所に集りて、是こそ日頃聞及ふ、鬼神とさたする者とも也、命斗ハ助からんと、ふるひわなゝきはひ廻る、女房一間に走り入、のふいかに旅人さま、夜盗か入て候也、御加勢有て給われと願ひける、其内ニはや夜盗とも、土蔵を破り金銀いるひ諸道具迄、大庭にほうり出シ山の如くに積置たり、又此上に有もやせんと家内のうちへみたれ入、戸障子を打破り、すてにとよめき入来る、八力目をさましおき上り、心得たりと五尺八寸の大太刀横たへ飛て出、大門小門さしかため、物をもいわず片はしゟ、はらり〳〵となきたをす、さしもの大勢大ニ驚キ、うろつき廻るを切りふせ突ふせ戦ふたり、其時女房しらあやたゝんテ鉢巻し、弓手に長刀かひはさみ、下女に酒もたせ、のふ旅のとの、自ら出て一はたらき仕る也、しはしつかれを休め給ひと申ける、八力聞て面白いざ肴に一かつせんと引受〳〵呑居たり、其時女房おとり出、すひさんなる盗人めら、いて物見せんと言まゝに、長刀水車に打振テ、大勢の中にわつて入、火花をちらして戦ひける、時もうつさぬ其隙に、三十六人一ッ枕になきふせたり、岩やかくれの源六是を見て、扨も切たる女めと、鉄棒追取てうと打ハひらりとぬけ、妻手へはらひハ弓手へ廻り、只飛鳥の如く也、源六大ニ腹を立、エイ己れいつ迄か面倒也と、鉄ぼう振上けみぢんにせんと打かくれハ、少し受しさつて拂ハ、南無三ぼう長刀ほつきと打おられ、すてにあやうき所へ八力はっといふより飛かゝり、鉄棒の先キしつかととらへ、ゑひやっと引うばひ、以てひらひて丁と打ハ、かうべみちんに打砕、落花となつて失ニける、大将角判見るゟも、夫あますなと下知すれハ、むら〳〵とおっ取巻、八力から〳〵と打笑ひ、鬼

にかな棒、龍に水、預ケたる如くにて、今にひしひてくれんとて、多勢か中にわつて入、まかう打ハみちんと成り、横に拂へハ五人十人打たをす、近寄る者をハ踏たをし、こくうむりやうに飛めくり、手本にすゝむやつはらを、つゝぬきねち首人磔皆殺しとそ成りにける、角判今ハこらへ兼、扨も見事の働よ、我こそハ熊沢角判なり、そこを引なと飛かゝる、ホゝ面白し望あひてといふ儘ニ、互に大太刀のさやはつし、こゝをせんとゝ戦ひける、いつれ上手の事なれハ、しゝふんじんとらんにう切さきゟくわゑんを出ししのきをけつり、けつられつ、火水になつて戦ひしか、八力エイめんどう也とたゝみかけて打けれハ、角判か太刀つは本ゟ打をれける、差添ぬかんとする所を八力太刀をからりと捨、鉄ぼうおつ取まかうへ打付けるを、ひらりとはつし、ぼうの先キむんつと握り、弓手へねち、め手へねち、互に引おうごかくの力鉄ぼう中ゟねち切ける、互にあきれて立たるハ、あらんの仁王にことならす、双方うちものめんとうなりよきくまんと尤と大手をひろけひんくんたり、ゑいや〳〵とねぢあふ勢ひ山もくつるゝ斗也、されとも勝負つかされは、互にいきゝれと、つかとざし、しはしにらんてひかひたり、かゝる所へ黒雲一村たな引しに、両足つかんて引上たり、其時八力むんつとしめ、えいやつと引けれハ、首は其まゝぬけにける、其時雲中よりいかに八力此角判こそハ、大六天の魔王なり、日本へおし渡り、切支丹にかたむけんとす、あやういかな、我は汝か父八郎左ェ門かれいこんなりかけ、身にをふて守らんと、行方しらすなりにける、亭主をはしめ家内のもの、喜ふ事は限りなし、時にあるし、金子百両さし出し、心斗の御はなむけとさし出せは、八力見て金子にハ望なくと辞退すれは、亭主承り少分なれとも此たひの御恩何を以てか報し申さん、責ては御路金にも御たしなミ給われと夫婦諸ともすゝめける、八力今ハ辞するに及はす、しからは受納いたさんと懐中し、たかひにいとまこひ、こわれ笠かたむけて出てゆく、是より信州にさしかゝり、音に聞へし善光寺をふし拝ミ、はつ崎村、とね山薬師、亀わり坂、名所古跡を打なかめ、いそけは今は越後のくに、かしわさきとや是なるか、宿〳〵里〳〵打過て、仙北秋田庄我国となる堺と聞からに、来つゝなれにし我国の七崎村に着にけり、五郎左ェ門御夫婦に南蔵の御なりさま一々語り申けれハ、夫婦の人々悦ひ玉ひ、八力に御さかつき下さるゝ、兎にも角にも南蔵の御身のうへ此八力か忠義のほと、前代未聞の事ともやと、貴賤上下おしなめて感せぬものこそなかりける、

八段目

我朝に聖王います時ハ、鳳凰あそふ、国に賢臣用ひらるゝ時ハ、麒麟来て禎祥をあらわす、国家の治乱、皆是人事にけつすと古キ文ニも書印、扨も南蔵ハ国土をもらさす行脚して、たとり廻らせ給ひしか、我住山ハいつくぞやと、めくり〳〵て今ハはや、東国奥の古すなる五戸の郷を行過て、こけ畑村

に付給ふ、日も黄昏になりぬれハ、有家に立寄一夜の宿をこわれける、あるじ立出、御僧殿ハいつちへ御通り候そ、南蔵聞召、愚僧ハ是ゟ西に向ひ言分山に参る也、亭主聞おろか也御僧殿是ゟ西に八の太郎と申者、山々谷〳〵つきひろけ、まん〳〵たる潟となし、住居候也、四五年已前迄ハ木こり杣取またはく人も通ひシか、自然と人のかよひなけれハ、大木古木打たおれ往来する事叶ひ難し、とゝまり玉ひと申ける、南蔵此よし聞召、我行の道ふんこつさひ身の法なれハ、夫こそ望所也と、明れハ宿を立出て、いそかせ玉ひハおとに聞、月日峠に付玉ふ、四方のけしきを見給ふに、すう山ぜつてうあひそびへ、数千丈の谷の水、こたまにさそひとう〳〵と、梢ニ伝ふ呼子鳥、空吹風の音迄も、御法の声と聞ゆらん、あら面白のふうけひやと、しばしたゝすみ給ひしか、一首の古詩を吟給ふ、空山不レ見レ人ヲ但聞ニ人語響一ヲ返景入ニ深林復照ス青苔上一ヲとしばしかんじて立給ふ、かゝる所に白雲一村まい下り、其中ニ孔雀鳥ゆら〳〵として岩の上におり立しか、短冊一枚おとし置、こくうにあかり失ニけり、南蔵不思義に思召、急キ取上見玉ひハ、よひ哉〳〵難行苦行かうをつもつて、其功徳大願すてニ成就せり、弥勒出世のあかつきにハ、必しやうかくうたかひなし、其中せひにハ衆生さひどなすべき也、猶〳〵行すへ守らんと斗留たり、南蔵御覧じ、御喜ひ天に向てきう拝し、猶奥深く分入ける、弓手に月山ふし拝ミ、はるかの峯にのぼらるゝ、月日峠と名つけしも、ことわりとこそ見えニける、是ゟすへハ道もなし、如何ハせんと思ひつゝ、立わつらひておわします、かゝる折から、はるか西より仏法さうと囀る声こわ有かたし、我行ハ神意に叶ひける、ぜんてうならんといさミすゝミて急かるゝ、大木小木のり越はねこへ見上れハ、ばんじんのつきかん峩として岩もる水にのんとをうるおし、足をつま立、木の根ニ取付見おろせハ、谷ふかうして底知れす、峯よ谷よと打こへて、暫（シハラク）たゝすミおわします、あたり詠て見給ふに寝ニ一ツの潟見へたり、南蔵立寄見給ふに、底深してあひにそみかうりんとして、水面しつかに見え渡る、かゝるしん山にケ様のたん水あやしさよ、定て主ハありつらんと、見廻す所にはるか向ふの波間より、年ハいざよふ二八の花いとあてやかなる女房のこつまかい取あゆミくる南蔵御覧じ何者なるそとの玉ひハ、女房申けるハ、のふ御僧さま向ひの岸へ御望候か、自ら御導引申参らせん、みつから肩に御取付候へと申ける、南蔵聞召、仰にしたかひ申さんとかたに取付給ひハ、陸地を歩行如くにて、やす〳〵と向のきしに付給ふ、南蔵ふしぎに思召、いかに女郎かゝる淋しき深山の人里也、たへてありつるに、鬼神ませうのものなるかあやしさよ、と仰ける、其時女申けるハ、されハ自ら水中に住ム龍女にて候、御僧殿ハ八世の先キ、ぬかのぶ丸と申せし時、自（ミツカラ）ハ妻（ツマ）にて候、其時の名はそらよと申せし也、しつとのねん深くして、あまたの女をねたミける、しんいのほのふ立登り、我と我身をもやしつゝ、つひに蛇ゑんの姿（すかた）とな

り、多くの女を取殺し、此水中に住居なす事七百才、我名をかた取、悪兵衛川と申也、斯いんゑん深き中なれハ、ちきりおひたる思ひの心、万かうふるとてもわするゝ事ハ、露の間も思ひこかるゝ泪の雨、はるゝ間もなくかきくもる、つきぬ思ひのかす〳〵を、ふひんとおぼし給われと、すかり付てそ泣居たる、南蔵聞召、扨ハさにてありけるか、御身の心に住んとハ思ひども、心に思ふ願あれハ、はかいの罪をうけん事おもひよらぬ事とも也、去なから我心願成就せハ、ともにみろくの出世を待、ぢやどうのくけんのかすへし、其内待へしとの給ひハ、龍女喜び難有し〳〵、さあらハ仰にしたかひ申さんと、潟の中に入けるか、又立帰り宴に一ツの難義さむろう也此先キ言分山の主八の太郎と申ハ、頭ハ八ツ其長ケ弐十丈あらわれんとすれハ、しゆみにたけをくらふる也、かくれんと思ひハけしの中ニも身をつゝむ、古今まれなる悪龍也、上十日ニなりぬれハ、此潟に忍来てみつからを女房にせんと申也、下十五日にハあれ御覧ぜよ、是三里道たつて(°)やつかうか嶽のちやう〳〵に一ツの池有、此主同し八ツ頭の大蛇、名をハ八丹八と申なり、本ハ奥瀬村の百姓也、彼も八の太郎ニおとらぬ大蛇、是も此方へ来り、自を女房にせんとちやうちやくす、其くるしミやるせなし、最早刻限まちかくなりぬれハ、追付参り申さん、御油断有なと語りける、かゝる所へ白雲うつまく其中ゟ、其たけ七尺余りの大おのこ、南蔵の御前に畏り、某をいかなる者と思召、上野和田の兵庫か家臣、伊達小野ェ門と申者ニて候、大しやく天の御ゆるしを蒙り、明神と罷成り、只今此池にて御難義のよし、大しやくの見付ニより、御加勢として参上とそ申ける、南蔵聞召こわ忝次第也、小野ェ門どの事ハ兼て明神と成給ふと聞つるなり、今の難ハ偏ニ頼奉ると語る、折からに八ツかうか嶽ゟも黒雲稲妻しきりにて、しやちくの雨をふらし、一さんに飛来て、彼池に入や抔や、いたけ高にのび上る有さま、頭は八ツ、百連の鏡のやうなる十六の眼をくわつと見開キ、天もひゝかす大音上ケ、いかに南蔵我をハいかなる者と思ふらん、本は奥瀬村民かんなるか子細有て、八ツかうか嶽の主と成る、八丹八とハ我事也、此池の龍女に心を懸て有つるに、汝来てうばひ取事のむねんさよ引さきすてんと言儘に、火ゑんを吹かけ飛かゝる、天馬館明神是を見給ひ、すひさんなる小蛇めと一文字に飛かゝりくまんとすれハ、大蛇ハつのにてはねかへす明神さしつたり、と首骨をしつかとしめ、ゑひ〳〵とねち合ともさらに勝負ハなかりけり、明神今ハ本胎をあらわし、はたひろの大蛇となり、互にくいつくわれつ宴をせんとゝ戦ひける、八丹八大ニいかりヤァこしやくなる小蛇めと、今に思ひしらせんとさけびける、明神聞てから〳〵と打笑ひ、ヤァこしやくとハ何事そ、おのれこそせひてうはつれのどうしんじやめ、あましハやらじと互にあらそふ其いきおひ、さしもの万水血しほと成り、彼をこくうに打上ケ〳〵戦ひしかハ、すさまじかりしあらそひ也、八丹八今ハ明神を振捨て、南蔵龍女を引

さかんと一さんに飛かゝる、明神御覧じて、どつこひやらじと尾前キをむんつとしめ付、エイヤ〳〵と引給ふ、龍女此よしを見るゟも、ヤア汝ハ今迄我をてうちやくせり、其へんしうに思ひしらせんと、潟へざんふと入と見えしか八丹八かどうなりにむんつと取付、八丹八是ハ願ふ所の幸也と、引さかんとかけ廻る、南蔵此由御覧じ、権現ゟ給わりし御杖を投付玉ひハ、八丹八かみけんにはつしと当ると見えしか、たちまつ通力を失なひ(°)わな〳〵ふるひどふとざし、血の泪をこほし手を合、あらもつたひなや、神力仏力に及ひなし、一命を御助ケたひ玉ひ、全く御てきたいハ申まじ、御けんそくと思召下されなハ、しぜんの時ハ御加勢仕らん、真更御ゆるしましませ、と地にひれ伏て申ける、南蔵聞召、よい哉〳〵一念ほつきむりやうかう、命をハ助け置、弥勒出世のあかつきにハ、必仏果を得させんとの玉ひハ、有難〳〵さあらハ御けんぞくの其印、とゆびをすんと切り大石におし付、八丹八か手形石とて悪兵衛川の水上に今に有とそ聞へける、此長く契約ましませハ、有難し〳〵と本の如く自在を得、黒雲に打乗り我住嶽に入にける、其時申さるゝハ、あやうき難を御のかれまし〳〵ける、大慶是に過す、重て御なんの其時ハ又もや参申さんと互に拝礼御成つゝ白雲に打乗て天馬館本社にこそハ入給ふ、時に南蔵龍女を召れ、我ハ是ゟ言分山に急くなり、大願成就と聞ならハ、必参り申べしと仰ける、龍女御別をかなしミ(°)しばらく見送り奉る、後に此龍女を小倉山祝ひ明神となし給ふ此時ゟ悪兵衛か池水たへて渡るもやすき悪兵衛川、今に古跡と聞へたり、是ゟ南蔵ハあまたの難所を打越て大瀧につき給ふ、四方にかうべを廻らせハ、水まん〳〵とすさまじく、岸打波ハ岩ほにせかれあひをそむかと見えにける、三拾丈の石門の雲井に落る瀧の水、岩にせかれて落る音、山かにひゝき音高しかきれしられぬ、けん山の苔なめらかにして岩ほ(°)そはたちじやくまくたる空山心ぼそくも分ケ登り、お松倉に付給ふ、時にふしきや権現よりたまわりし糸のわらんじきるゝとおもいハ、蓮花と成て海ニ入にける、南蔵にわありかたし、我すむ山ハ是ならんとよろこびいさみ玉ひしか、懐中ゟ法花経取出し心をすましとくじゆ有る、其聲(コイ)ハこたまにひゝき、五色の雲たなひき、もろ〳〵のぶつぼさつようかう有、神社権社あつまり給ひ、寺ニなすこそハありかたき、かゝる折しも、いつくともなくさもいつくしき女郎のたけの黒髪うしろへさつとふりみたし、しほ〳〵とおそばニ近く来りて御経をてうもんし、余年なくこそ(コソ)みゑにけり、南蔵御らんし、かゝる山中女人かよふ所になし、迷ひ化しやうのものなるか、いかに〳〵との玉ひハ、其女性泪を流しうらめしの仰やな、自ハ兵庫か娘おとよ也、御願成就ましますを待もふけてハ候え共、余りに恋しさますかゝみ、今宴に待わひ候君、日夜御回向給ふ故成仏の果ハ得るといへ共、刃(ヤエハ)のくるしミ絶かたや、此くけんのすくひ玉ひと泪に暮ていたりける、南蔵聞召、扨もふびんの有様や、いて成仏

ゑさせんと天ニ向てがつしやうし、権現ゟ玉わりし御杖を振上給ひ、天しやう〳〵地しやう〳〵六根しやうぐ〳〵祓ひ給ひ清めたもふ、あぢ十方三世一切諸仏だち八まん諸しやう経有難やたちまちに有し姿を引かへて、によひりん観音とあらわれ給ひ、今のお松倉明神是也、其時南蔵にの玉ふやう、此潟の主、上十五日にハ此沖をしやう人と変じ通るへし、其時くわの弓によもきの矢いさせ玉わば生躰をあらわすへし、是を御退治あつて此山ニ跡をたれ給ひ、天じん地きも御加勢有べし、随分神力願ひ給ひ、またもや参り申さんと光をはなつて(°)こくうにあからせ給ひける、宴ニ又はるかの跡より、其丈ケ七尺餘りの大のおのこかつちうを帯し、五尺三寸の大刀八人張の弓手脇に横たへ、慎んて畏参を如何成者と思召、四の崎八郎左ェ門只政にて候、主に忠孝儀心の程たいしやく天につうじ、自在を得るといへとも、刃のくるしみさわりと成ル、君此山に御神座(ザ)の御加勢申上度今宴に参りたり、此くけんを御すくい給われと申けり、南蔵聞召、偖ハ只政にて有けるか、さらハ明神の官をさつけんと宝珠を頭に捧、天に向てかつしやうあれハ、たちまつ姿引かへて大瀧明神とあらわれ給ふそ有難、其時のよろい石甲石とて、今に有とそきこへける、かゝる折から風そよ〳〵と音つれて、山内しきりにいんゑいと草木動と見へけるか、さもいつくしき少人波の上をあゆむ事(コト)、平地を行ことく也、南蔵御覧し、是そ龍女かおしへ也、とくわの弓によもきの矢をはなし給ひハあやまたす、少人のみけんへはつしと立ハ、かなくりしておとるとみへしか、其形チ壱丈斗りのやじやと也、鉄でう引提ケ向をはつたとにらみし勢(イキヲ)ひに、大木小木たおれける、天もひゝかす大音ニて、八大龍王御加勢あれ、我父黒龍急き参られよ、池のどうの龍王達集り玉ひ、其外大沼小沼の大じや小蛇、我住内裏にがうてき(テ)有、出よ〳〵とよばわつたり、この声にしたかひ大蛇小蛇黒雲に打乗り〳〵、しやぢくの雨をふらしあつまりしハ、すさまじかりける次第也、宴に龍宮ニてハ、八大龍王手下のけんぞく召集め、ヤアかた〳〵言分山の主、八の太郎きうなんのよし、いつれも加勢いたされよ、我も行んと数多のけんそく引連て、黒雲に打乗〳〵雷でんいな妻しやちくの雨をふらせ一さんに懸集る、すさまじかりし有様也、八の太郎下知をなし、あれ〳〵見給ひ、敵ハくかに扣たり、中にも憎きハやせ坊主、掴ミひしひて捨られよとよはわりける、父の黒龍大音上ケ、我子の山をさまたけんとす、悪僧めみぢんにせんとさけひける、うしほをけ立波をあらしてかけ来り、すてに間ちかく寄来る、大瀧明神是を見て、五尺三寸まかう目かけヱゝヤット打かくる、黒龍心得たりと、つのニてからりと請けれハ、さしもの大太刀つば本ゟほつき折、波にざんぶと入にける、大蛇いよ〳〵いかりをなし、火ゑんを吹かけ引さき捨んと飛かゝる、明神事ともせず首の骨をしつかと〆、宴をせんとゝねち合ける、明神入きの徳に寄り、一ふりふつてヱゝやつと向ふの岩ほに投付るれハ、うんと言て眼をくら

ミどうと臥す、池のどうの赤龍是を見て、ヱイしなしたる口をしや、今ニ思ひ知らせんと一文字に飛かゝる、お松倉の明神是を見給ひ、あまさじと大蛇のせなかへひらりと乗、両の耳をしつかとしめ、ヤア面白し、一馬場乗て見せんとてつのをつかんてくる〳〵わのりにかけて乗玉ふ、大蛇いよ〳〵いかりをなし、振おとさんと働ケども、いかておよばん神通力、ヱゝ思ひ知らせんといふより、どう中ひつつかみヱゝトイウテ投玉ひハ、半死はんじやう身ぶるひし跡をも見すしてにけて行、悪龍ども是を見て、夫あますなと火ゑんを吹かけ一度にどつと寄来る、かゝる所へ釼吉の明神加勢をせんと三尺五寸の利けんを持、潟にざんぶと飛て入る、二神ハ是ニちからを得て、三神一所ニ打てかゝる、大蛇小蛇いかりをなし火ゑんを吹かけ飛かゝる、弓手め手に相つけて、宴をせんとともみあへける、釼吉の明神ヱゝいつ迄ものを思わせん、と大のけんをてうと打ハ、大蛇かどう中を真二ツに切捨たり、されば共頭ハ飛かゝるしきつて拂へバ彼首をはらりずんと打落し、龍王とも是を見て夫あますなと一度どつと飛かゝる、三神じん通むへんの働に、さしもの龍蛇村〳〵ばつと逃て行、ヲゝさもさふずさもあらんとてん手に利けん引提〳〵本陣さして引給ふ、かゝる蛇しやうのあらそひハ、上古も今も末代もためしすくなき事ともやと、きせん上下おしなめてかんせぬものこそなかりける、

九段目

柔敵おこる時ハ、西海街に満とさう方ごかくのあらそひにいつはつへしと見へハこそ、釼吉明神是を見てしやあまさしと、大のけんをてうと打ハ、しつかとくわへくる〳〵と岩ほにてう〳〵と打付ミちんにくたけ玉ちる、あられ氷りをちらし如くなり、大瀧明神はつと言ゟ鉄ぼうおつ取のへ、ゑいやつとおかみ打に、てうと打ハ火ゑんを吹懸ける、鉄ほうたちまち潟と成て、なんの用ニも立ハこそ、小松倉明神あましなとむつと組、大瀧明神釼吉明神左右ゟ取付ける、なんた龍王是を見て、から〳〵と打笑い、内子持だちの(。)やせ明神はら幾万騎かゝれ〳〵とよはつて、互に金剛力を出ス、ヱイヤ〳〵とあらそいしハ、山下草木とうよふし、荒波こくうに巻上〳〵戦イしハ(。)すサましかりける次第也、三神今ハ勢つかれ、すてにあやしく見えにける、南蔵御覧し宝珠を取てくわんねんし、なんた龍王かみけんに投付けれハ、たちまつ眼くらみこわ叶わすと跡をも見スして(。)にけて行、三神追掛〳〵てうと打ハ、弓手め手の鱗を切はなされ、けんそく共に助られ、龍宮界に逃帰る、ほう珠のいとくそ有難、三神ためいきほつとつき、しばらくやすらひおわしける、八の太良是を見て、ヱイかひなきやつばら哉、いて物見せんとおとり出んとしたりしか(。)まだまてしばし我心、此日本を切廣け、青うな原とつきこめて、我すまんと思ひしか、彼等ふせひに

手を下タしにハ及まじ、兼て言合せし大六天の魔王をたのんて打取らんと天に向て招きけれハ、魔王の大将あしゆら王、此由を聞てひとしく心得たりと言儘に、あまたノけんそく引くして、下界へ下る有様ハ、しんどう雷てん黒雲いな妻大風古木吹たをし、しやちくの雨をふらせつゝ、せつなか内に下りしハすさまじかりける次第也、八の太郎対面し、此度の事ともひとへに頼申也、しゆら王聞て、ヲゝ心やすかれ、其神社権社のやつ原を、一〳〵けころし此日本をまこくにせん事何の思案に及べきと廣言はひて立居たり、南蔵此由御覧じて、あらおびたゝしの勢ひ哉、我自力ニハかのふまじ、さらハ諸事を祈んといらたか(°)珠数を押もんて、上ハぼん天たひしやく下界の地にハ伊勢ハ天照大神宮、王城のちんじゆにハ稲荷ぎをん加茂かすか、宇佐の宮にハ正八幡春日ハ四社の御宮也、貴船ハ五社の大明神、中にも頼奉るハ熊野三所大権現、奥州にハ一百神、兼てしけひに頼奉る、明星天本地こくう蔵大菩さつ(°)りうけ山にせんじゆせんけん観世音力を添へさせたび給ひ、其外の神社権社御加勢有て玉われと、一心ふらんに祈らるゝ、もろ〳〵のふつ(佛)菩薩諸国の神〳〵来会まし〳〵、守護有こそハ有難、修羅の大将下知をなし、時分かよきそ、サアうつ立テものどもと波打きわにつつと立、大音上ケ我ハ是大六天の魔王阿修羅王か弟かうくわつきと言もの也、三年以前木曽の熊澤角判かたましひニ、我けんそくかうまんきを入替らせて、日本を魔国にせんと思ひしに、汝等さまたけかうまんき、ヤミ〳〵とうたれたり、今八の太郎に一味して、日本打やぶり魔国にせんとよはわつたり、其時大瀧明神あらわれ出、ヤア廣言も時による、夫ハぼんぶ(ニ)にいふ事そ、我〳〵あらん内ハ中〳〵叶ふまじとの給ひ(イ)ハ、修羅王いかりをなし、ヤア明神かうまんきかかたきなり、いて物見せんといふ儘に、拾丈斗の大石をエイヤツト投付る、明神心得たりとちうにひらりとかひ摑ミ、此石かへす請取と、エイトいふて投かへす、かうくわつきちうの程にてかひ摑ミ、かしこにどうと捨にけり、ヤアなまぬるしけんそくとも、かけよ〳〵と下知すれハ、数万のけどうかうまのさかほこ振立〳〵切てかゝる、勢ひハおそろしかりし有さま也、三神心得たりとひしゆつのじゆつをあらわして、八方立わり横手切、じうおうむつ(ち)んに切てまわれハさしもにたけき修羅のけんそく、村〳〵ばつと引にける、其中に一丈余りの大のあつき一さんにすゝみ出、大音上ケ名のるやう、我ハ六天ニかくれなきすもふの名人風来げどうとハわか事也、日本の明神ばら一ばん所望とよはつたり、釼吉明神から〳〵と打笑ひ本方相撲ハ得手のみち、それこそ所望也、と互にさそくをどう〳〵と踏かため大手をひろけむんつと組、ゑひや〳〵とねちおふたり、げどうの取手ハ何くそ夜みのよの石ころばしほねずしぬひてちうに投よつかひしきむしきさうを始としてむりやうむくうに手を取たり、明神とらせ給ふ御手にハしゆみせんおとしのみぢん投、大瀧おとし坂おとし雲にかけ橋大わたし(°)あけ

巻摑んてどうひねり、ヱイヤ〳〵と互にあらそふ其勢ひ、山こくにひゝきしんどうす、大将八の太郎石城に腰をかけはかみをなし、ヱイふかひなのやつばら哉、夫かうべをむねにあて弓手の角をさしこんて(°)かひなを(°)しめてあねかへせと気をもミあせりさけびける、大瀧明神小松倉明神利釼引提大音上ケ、ヤア下手につひて弓手の肩をさし込ミ妻手の足をつよく踏うてをからんてはねかへせと互ニせりかけあらそひしハいさき能こそ見えにける、明神下手に付、くるり〳〵と付ケめくる、げどうかさにかゝって押ひしかんと、金剛力を出して押付る、明神すきを窺ひ波をけたてゝ内上ケよりひつかけてヱイヤットひったおし(°)すかさす首をねぢ切て、にっこと笑ひ立居たり、南蔵餘神見給ひて、扨も取たりお手から〳〵と御悦ひハかきりなし、此時ゟも釼吉明〇内子寄合角力勝負始る事、今に盛りと聞へける、大将八の八郎是を見て、ヱゝむねんの次第かな、あましなけんそく共うけ玉わるとすまんのけどう大ばんじやくをなケかけ〳〵うしほのわくか如くにて、四方よりおっ取込め、時をとっとそ上けにける、今ハ三神もすてにあやうく見えにける、かゝる所にしきのよろこひに釼引提、多勢か中へ分て入、まかう小ひたひ左右のうて足にさわるを踏殺し、宴をはれと打て廻る、三神是に力を得、八方立割横手切り、じうおうむちんに働ハ、時もうつさぬ其隙に七神の御手ニかけ、二三百一ッ枕に切ふせたり、残りしやつ原半死半生村雲に打乗て行方しらす落うせける、外導くわっき是を見て、ヱイ口おしやと一丈五尺の両刃のほごを引提、天ゟ火の雨をふらせ大地も崩るゝ大音にて、扨もむねんの次第かな、兎角南蔵をうらみ也、摑ミひしひてすつへきと(°)てつくわをちらし火ゑんを吹かけ飛かゝる、三神あまさじと打てかゝる、あやうかりける事とも也、かうもく天御覧じ、推参なる外導めとむねいたはつしとけ玉ひハ、通力うしなひよろ〳〵とよわる所を三神走り寄て三方ゟ切てかゝれハ、外導ハおんとり上り逃んとす、西方ゟ天照大神かぶら矢をひっかけ待給ふ、南へにけんとしたしか、春日明神利刃を振て待かけたまふ、今ハ通力自在を失ひ大地へどうとまろひける、三神立寄ずた〳〵に切捨たり、其時かうもく天声を上ケいかに南蔵大六天の魔王八の太郎にくみし汝か身の上あやうき事、たひしやく天の見付ニゟしゆミの四天加勢としてあま下る、はやく八の太郎追拂ひて力をそひてゑさせんとしばらくやすらひおわします、南蔵こわ有難しと御悦びハ浅からす、八の太郎是を見てヱイむねん口おしや、日本ハ扨置、唐土迄もしたかへんと思ひしに、我ぞん念いかに南蔵法も一丈、某も一丈汝と我と直に勝負をけっせんと飛かゝる、大瀧明神八人張に大のかりまたひっかけ、きり〳〵たつもッてはなち、矢ハしんどう雷てんなり渡り、八の太郎みけんニ羽ぶるひしてはつしと当る、もの〳〵しやとかなくりすて浪間にざんぶと入と見えしか、弐十丈の大蛇となり眼ハ百連の鏡の如く角ハ深山の古木ニ事ならず、いかれる声ハ天はひそうの

空につうじ地ハこんりんのならくの底迄もひゞくらん、しんどう雷てんしやちくの雨をふらせほのふを吹かけ〳〵かけ出る、時に小松倉明神利刃を取て丁と打ハ、利刃ハみちんに砕ける、八幡大菩薩かふら矢違ひはなし玉ひハ、あやまたつ真只中にはつしと立ハ事ともせず、かなくり取いかりくるひし有様ハあやうかりける有さま也、南蔵今ハ我手詰の勝負なり、我一念すひしやくなさしめ給ひと、天地四方をらひ拝し、法花経を身にまとひ、波にざんぶと入にける、しはらく有て波の上ニ浮ミ出たる其形ち、弐十丈の大蛇となり、此時法花経の文字の数八万四千ハあうんの口草木迄もどうようし、空吹風の音迄も加勢の声とや聞ゆらん、火ゑんを吹懸波を(°)けたて互にあらそふ其勢イ四方の山なり谷ひゝき、山谷くつれて潟に入、がんぜきげきして火きへつる天地しんどうしやちくのあめをふらせつゝ昼夜三日の戦ひハおそろしかりける次第也、八の太郎らも今ハはや数多のきつを蒙りて、身ゟ流るゝ紅ハ、秋のもミちのちり落て瀧に落るに事ならす、さしもの万水あけにそみ、玉ちる水ハさんごじゆの玉をちらし如くにて、八の太郎も死物くるひ、ヱイむねん口おしや、我住ム山をうばわんとハ不法やじんのいも掘めいて思ひしらせんと眼をちばしり髪さか立、角をふり立はをならし、いかれる声ハ天地をとうしすてにあやうく見えにける、神社権社もろ〳〵の神佛集り玉ひ、今天下わけめ也と、得物〳〵を打かたけ四方をかため立給ふ、其時熊野の権現すゝミ出、大音上ケ、ヤアいかに八の太郎今ハはや叶ふまじ、角かたむけかうさんせよ一命助ケまつしやとなして召遣わん、さなくハ我手に懸んと大の弓にしんつうのかふら矢打違ひ待かけ給ふ、八幡春日神社権社もろ〳〵のかミ仏、弓と矢をさしはさミ、あますまじと立玉ふ、八の太郎大ニいかり我住かヲさまたけ、斯迄恥辱を取事ハ、南蔵法師に恨有、いかて降参なすべきそ、此度はまくるともつひにいきどうりをさんせんと、きばをならして立居たり、其時四方ゟ射かくる矢、其身に立事みの毛の如し、剛力むへんの八の太郎、神力多勢に叶ひ難く、重て本望とくべき也と、山をよちて逃去りける、諸神是を御覧じ、何国までもあまさじと跡しとふて追かくる、今ハはや詮方つき、百丈斗のがんぜきをおとり越ひ、黒雲に打乗て行方しらす落失ける、岩ほハちしほに染なして、今のあかねか崎是なり、時に南蔵水の面てニ浮ミ出、三神ハ跡に残らせ玉ひ、さあらハ潟をきよめんと大瀧関門を切ひらき切てはなし玉ひハ、重て清水まん〳〵と御法りの潟とすミ渡る、いざや大内を宮立んと水中に四拾九院の仏額(カク)を立、くうてんろうかくあさやかに、金銀るりの柱を磨、こうやうらんかん立ならべ、麝香(シヤコウ)のゆきけた瑪瑙(メノウ)の石、しつほうしやうごんのきだはし、玉のてんかひ錦の簾こくうむかの風になびくみきわの池にハ、ぐぜひの船綾の帆を上ケ、錦のへつな常楽(シヤウラク)かじやうの風吹けハ、みきわの花ハしやとうよに開け、上求菩提(ジヤウグ)の果をしめし、しゝんしんきやうの秋の月ハ、水てひに影うつりて下化衆生の気

をあらわす、諸神諸仏ようかう有、諸悪まくさしゆぜんぶきやうと天(あま)くだらせ給ひ、来世に残るすひしやくの和光同ちん、おのづから残る威徳そ有難、是ゟ十和田山大権現とあらわれ玉ひ、弥勒出世のあかつきを、松に花咲縁の潟、衆生のがうくをすくわんとちかわせ給ふそ不思義なり、扨小松倉明神本地如意りん観世音とあらわれ玉ふ、大瀧明神御同座にてまつ社とハなり給ふ、一度参詣の輩ハ冨貴圓満、子孫繁昌火難水なん病苦の難すくわせ給ひ、齢命長寿と守らせ成仏徳たつ得させん事うたかひのあるべきや、誓くわん有こそ有かたけれ、扨も五郎左ェ門此由聞ゟも、急ぎ八力をめされ、十和田に南蔵御神座の由、今より諸人歩行をはごび参詣の輩おふからん、我等夫婦参る也、汝千人の夫(ぶ)をやとひけん山を(。)たひらけ大木を引のけ、人馬の通用能様に、難所〳〵を切ひらけ、扨又熊野の権現の御宮を建立して、鳥居の高サ壱丈五尺、小松倉明神大瀧明神是も同く社を立、末社にせよと仰けれハ、八力畏り候とそれよりも大工杣取数千の人夫(ぶ)御宮をあざやかに建立成就なしけれハ、永福寺法印も御悦びハ限りなし、五郎左ェ門御夫婦ハ参詣まし〳〵供養のぎしき取扱ひ、此日道を踏初め玉ひハきせん老若くんじゆして、袖をつらねて分ケ登り参詣なすこそ有難、是偏ニ御代長久のもと意なるわと諸人賑わひ喜びける、千秋万歳神徳のれいけん、末世にいぢじるく納(おさま)る世こそ目出たけれ、

附記

翻刻にあたり奥書に「文政八乙酉年卯月良辰舛屋喜惣司」とあるほぼ同一本文の写本を参照した。

底本の所蔵は慶應義塾大学図書館（二一四・一五〇・一）である。

閲覧、翻刻掲載を御許可頂きました慶應義塾大学図書館、並びにご教示を賜りました石川透先生、成田守先生に厚く御礼申し上げます。